

町から戻った『マナ』は、その晩買ってきたパソコンの箱を開け、本を取り出し読んでいた。その表情は普段無いぐらいニコニコしていた。次に大きな本の様な塊を取り出し、それを二つに開いて、器用に指先でその本の中を叩き始めた。するとその本の様なものが輝きだし、変な物が写し出された。その写し出された画面を見ながら、『マナ』は更に本を指先で叩き続けた。すると画面は次から次に変化し、不思議な世界が広がって行く。『マナ』は部屋の片隅で、ベンジャミンのお茶を飲みながら、その不思議な世界に見入っていた。

『マナ』は次に、別の小さな箱の中から、何やら円盤の様なものを取り出し、先ほどの本の中に入れた。暫くして画面には、丸だの、四角だの、色々な形が現れ、楽しそうに変化して行く。『マナ』の顔を見ると、そこにはとても楽しげな表情があった。

『マナ』が「何してるの」と『マナ』に尋ねると、「パソコンの設定」と、つれない返事が返ってきた。「パソコンの設定って」と『マナ』が聞き返すと、「設定はパソコンを使えるようにする為に、色々なことをキイから入力するの」と言っていて、指先で叩いて見せた。暫く見ていた『マナ』は、やがて何やらズングリした手で、ちゃぶ台を叩き始めた。その音は、とてもリズムカルとは言えるものでは無く、ゴンゴンと言つ単調な鈍い音であった。

「よし出来た。今日はここまでにしなう。明日はまた仕事だ」と言っていて、『マナ』は首を左右に振って、更に背伸びをした。『マナ』は何故か「うん、うん」と言っていて、首を立てに振っていた。

